

土 淨

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 再版省（特別授受認可雜誌第三五二号）
昭和四十七年十二月二十五日印刷 昭和四十八年一月一日發行



第三十九卷 第一号

1973

1





＝夜明けの富士＝

——目 次——

表紙 「う し」松涛達文画

年頭に当りて

大聖文殊像一体……………	岸 信 宏…………	(2)
法は人を以つて興隆す……………	宮 本 文 哲…………	(5)
法話と偈示伝道……………	石 井 真 峯…………	(6)
心にきまりを……………	一 条 智 光…………	(7)
私と「正月」……………		(9)

佐藤治子・長谷川よし子・漆間徳然・山野井杲琇

現代生活と浄土教……………	山 本 空 外…………	(16)
「春」のお歌〈1〉……………	村 瀬 秀 雄…………	(20)
選択集講話① 『選択集』の成立……………	玉 山 成 元…………	(22)
丑(うし)の年……………	安 井 香 山…………	(26)
念仏・人と歴史① 法然上人をめぐる人びと……………	伊 藤 唯 真…………	(28)

正 月 号



めでたさも

中ちゆうくらいなり

おらが春

——茶——

正月が「めでたいもの」と誰がきめたか知らないが、余り、手放しにめでたがってばかりはいられない。一休禅師ほど天邪鬼ではないから「正月は冥土の旅の一里塚」などとはいわぬにしても、年をとるということに、重みを感じるこのごろである。一年のはじめの時の区切りとして、心気一新することは大切だが、屠蘇も雑煮もほどほどにしておきたい。仏教の根本原理が「中道」——かた寄らぬ心にあることを改めて味うことである。

(S・T)



年頭に當りて

大聖文殊像一体

浄土門主 岸 信 宏

昭和四十八年の御歌会初めの御題は「子供」と仰せ出されている。宗祖法然上人の子供時代的一端について考えて見たいと思う。

法然上人の幼名を勢至丸といったことは、上人の種々の伝記の一致する所である。この勢至丸という名前は誕生当時からのお名前であるかどうかは確証がない。然し後に出家せられて、比叡山に於て智慧第一法然房と称せられたことから、伝記作者がつけた名前ではなからうかと歴史家という。勢至とは菩薩の名前であって、浄土宗の本尊である弥陀三尊の場

合には、阿弥陀仏の慈悲の働らきを現わした方として左側に観音菩薩をまつり、阿弥陀仏の智慧の働らきを現わした方として右側に勢至菩薩をまつることになっているのである。當時各方面に於て第一の譽を得た人を源平盛衰記第四十四には四人あげている。即ち智慧第一法然房、持律第一葉上房、度第一春乗房、慈悲第一阿証房である。持律第一の葉上房とは支那から臨濟禪を伝えて建仁寺を開かれた榮西禪師である。支度第一の春乗房とは法然上人に帰依をして後に東大寺の大勧進職となられた俊乗房重源上人のことである。慈悲第一の阿証房とは長楽寺印西上人のことで、勅修御伝第四によれば法然上人が醍醐に三論宗の先達權律師寛雅を訪問せられた時に、その御供をしている。

この勢至丸は保延七年の春九才の時に、父時国公が、朝廷から自分の郷里の美作の国の稲岡の庄の預所として差遣せられた源内武者定明に怨みを買うことがあって、夜討をかけられて非業の死をとげられることとなった。その時、父時国公は臨終にあたり、一子勢至丸にこのことをうらみとして、敵定明を討つようなことをしてはならぬ。若し仇討ちをするようなことあれば、また定明の方から仇討ちをするであろう。しからば仇討が互にいつまでもつづけることがなかろうから、そうした世俗の煩いからのがれて、早く出家をして私の菩提

をとぶらい、みずからも解脱の道を求めるようにせよとの遺言であった。この遺言が一子勢至丸の生涯を支配するようになったのである。

勢至丸の母は秦氏の出身である。その弟に観覺得業という方が同国内の今の津山市の近くの菩提寺という寺に居られた。そこへ九才の年の秋に弟子入りして出家の道をたどられたのである。観覺得業は勢至丸の非凡の才に気付いて、この子供をいつまでも辺鄙の田舎に置くべきでないとして、当時仏教を学ぶ中心地であり、自分も永らく勉強をした比叡山上らしむることにした。

勢至丸の比叡登山の年時については古来異説があり、十三才説（天養二年、久安元年）と、十四才説（久安二年）と、十五才説（久安三年）とがある。十三才説を取るものは、法然上人の伝記の内で成立の古い私日記、四巻伝、弘願本、琳阿本、十六門記、十巻伝、正源明義鈔等である。近年の学者は多くこの十三才説を取っているのである。十四才説を挙げているのは、行観の選択集秘鈔、良定の選択之伝等である。十五才説は勅修御伝（四十八巻伝）、醍醐本、九巻伝、古徳伝、良忠の選択決疑鈔、堯惠の選択私集鈔等である。本宗では御伝記として最も重んじている勅修御伝の十五才説を取っているのである。昭和三十八年に大正大学の榎田良洪博士が

東寺宝菩提院所蔵の古文書の中から法然上人の高弟の一人である隆寛律師の知恩講私記というのを発見せられて大正大学学報にその解説を発表せられた。更にこの書物について、三

田全信博士が、法然上人の成立史的研究第四卷に詳細にわたって考証研究を発表せられた。これは律師が法然上人の滅後、上人の御追善回向に使われた講式ものであって、表白として使われたものである。その内容は上人の御徳を五種讃嘆し、各讃の終には七言四句の偈と「南無尊重讃嘆先師聖霊」の句が添えられてある。五種の讃嘆とは、第一が「諸宗通達徳」、

第二が「本願興行徳」、第三が「専修正行徳」、第四が「決定往生徳」、第五が「滅後利物徳」というのである。その中の第一讃の「諸宗通達徳」の下に「俗称漆間氏、美作州人也、

生年三五春、始攀四明山、同年仲冬、登壇授戒」とある。文中「三五春」とは十五才の時の春をさすのである。勅修御伝に「童子十五歳、近衛院御宇、久安三年春二月十三日に千里の霞をわけて、九禁の雲に入る。乃至同年十一月八日、華髪をそり、法衣を著し、戒壇院にして大乘戒をうけ給にけり」という文と符を合わしているのである。東寺宝菩提院所蔵の古文書から発見せられた知恩講私記は法然上人の滅後十六年にあたる安貞二年に信阿弥陀仏によって書写せられたものであるから、原本は隆寛律師によって、法然上人の滅後数年な

らずして作られたものと思われるのである。この知恩講私記の発見によって、法然上人の登山は十五才の春で、登壇授戒はその年の冬であったことが確認せられるのである。

観覺得業が勢至丸を比叡山に送る時には、自分が比叡山にて勉強中の知人であった西塔北谷の持宝房源光のもとに入門せしめたのである。その時の手紙には、唯、「進上大霊文殊像一体」と書いてあったということは上人の伝記の殆んどすべてが一致するところである。

文殊菩薩は普賢菩薩と共に釈迦牟尼如来の脇侍としてまつられ、これを釈迦三尊と称え、文殊菩薩は釈尊の智徳を現わし、普賢菩薩は釈尊の行徳を現わす菩薩とせられている。我が国の言葉にも「三人よれば文殊の智慧」という諺もある。

持宝房源光はこの手紙を受け取って、文殊の像を探したが、そこには一人の童子がお供をつれて立っているばかりである。この童子が非凡の智慧者であることを知り、自分の手に置くよりも、当時比叡山に於ける学者として有名であった東塔西谷の功德院肥後阿闍梨皇円のもとに送って、本格的に法華三大部の天台宗の教学を勉強するようにしたのである。「大聖文殊像一体」であった勢至丸は後に智慧第一法然房の誉れを得るようになったのである。

出家する子供を比較に送るふみ文殊の像一体とあり



法は人を以って興隆す

宮本 文哲

(大本山善導寺法主)

諺に、「少年は未来に生き、青年は現在に生き、老年は過去に生く。」と云うのがある。誠に言い得て妙である。即ち少年は、「僕が大人になつたら、」と将来に夢を描き、其の反対に老人は、「俺の若い頃は」と過去の夢を追ひ、青年は現在に夢を托して、己が目的に向つて全力投球するのである。其れ故現在社会の明暗は、一にかかつて青年の雙肩にあり、と云うも敢て過言ではない。

扱て然らば現下の世相はと見渡す時、それは仏者の謂う、「世は正に末世なるかな」である。人々は唯徒に權利權利とわめき立て、權利の裏づけとして義務ある事を忘れ、我慾の爲めに我子を殺す凶惡な親さえ現れたのである。かかる悲しむ可く、恐る可き世相を今の流行語で、「心の公害」と呼ぶのである。之の恐るべき心の公害を撲滅する騎士として、現

在に生きる青年宗教家の奮起を、切に望むのである。

仏典に、「法独り弘まらず、人を以って興隆す。」と真に至言である。今これを例を挙げて示さんに、ここに勝れた楽器がありとする。如何にそれが名器であつても、之を奏でる勝れた音楽家がなければ、結局宝の持ち腐れである。それと同様、教祖釈迦牟尼世尊の教、又宗祖法然上人の訓が、如何に勝れていても、これを弘隆する人がなければ、それは手の届かぬ高嶺の花である。私はこの高嶺の花を手生けの花となし、以て恐るべき心の公害を除去し得る者は、現在に生きる青年宗教家であると信ずるのである。そして其の能率を上げる爲めには、個人よりも十人、二十人と集団を組み、一致協力して事に当る時、其の効果は倍加するのである。

此度我が浄土宗が、記念すべき開宗八百年を迎うるに当

り、挙宗一致の祝賀記念行事の一環として、北は北海道より、南は九州まで、全浄土宗青年会が、大同団結して、ここに「浄土宗青年会連合協議会」が生まれた事は、真に時宜を得た好個の記念行事である。



法話と揭示伝道

石井 真峯

(大本山光明寺法主)

—
新しい年が皆様にとり多幸でありますよう心からお祈りいたします。

私は全国的に旅行をしていませんでよくわかりませんが、多くの地方で寺院の建築が立派になったようです。それに加えていろいろな儀式、法要もはなやかに行なわれますので、仏教が重視され、一般国民に大きな影響を与えていると思うかも知れませんが、果してそうでしょうか。仏教が真に栄えるということは、その教えが一般民衆に理解され、その上それが日常の生活に実践されて、社会浄化と向上のためになるというのでなければならぬと思うのです。そのために

希は浄青連協の諸君！ 諸君は尊き仏祖の教訓を体して、会の本旨に則り、恐る可き心の公害を追放して明るい社会の建設に、努力精進せられん事を、切に断念するものである。

合掌

—
はもつと大衆に聞法の機会を与えなくてはならないと考えます。それも老人ばかりでなく、比較的若い者にも与えられなければなりません。そうかといって寺で講演会、講習会を開いても集まるのは少数の老人ということにならなければさういいです。このままでゆくと日本仏教は次第に老化してゆくのではないかと心配されます。

二

—
そういうことを念頭において私は二つの提案をしたいのです。すでに実行されていれば誠に結構ですが、仏教だけが持っている機会、つまり法要の機会、この席には老若男女が集まります——この席でかたくりしい仏教の話だけでなく、誰

にもわかる話をして仏教を上手にとり入れ、仏教理解と実践の助けとしたいものです。聞いてもわからないお経を棒読みして法要をすませ、はい、左様なら、では勿体ないことです。短かい時間になる話をするのは困難にちがいないのですが、日頃の研究を生かして効果をあげたいものです。

三

もう一つは揭示伝道です。黒板が一枚寺の入口にあれば間に合います。先頃田舎の自坊の黒板へ「お前が悪くておれが」と書いて置きました。それから間もなく、日暮れに一人の中年男が訪ねて来て、門前の言葉に深く感謝しました。私は短気で、その日、会社の上役が

気に入らないので殴るつもりでしたが、あの揭示板を見て思いとどまり、それからは憎い上役にも可愛がられるようになりしました。近いうちに母の法要も営みたい、檀家にもして頂きたいと申出て来しました。自動車に乗っていても、自転車ですっていても読める程度のものが最も適当でしょう。それも仏教まる出しばかりでなく、読む者が「なる程ね」と思えるようなものが適当です。私は揭示板の文字が変わるのを楽しみにしています、いつまでも文字が変わらないとがっかりします、一々手帳に書きつけます——などの意見が寄せられます。なかには私の書いた意見には賛成出来ないと言ってくる人もありますが、これも参考になります。

心にきまりを



一条 智光

(大本山善光寺大本願法主)

明けましておめでとうございます。

毎度のことながら年改りまして何かしら心の引きしまる思いが致します。

春夏秋冬四季の変化がはっきりしている日本の風土は、心にきまりをつけるのに誠に幸せであります。

私達が日頃めたいものとしているものに、松竹梅があり

ます。この中のあの細い竹が風雪に耐えて行かれるのは節があるからです。若しあの節がなかったならば、すぐ折れてしまいましようが、少し伸びては一節でき、また伸びては一節できることによって、竹は丈夫なのだと申します。それと同様に私達の人生に於ても節のあることが大切であります。今日の日は、昨日の続きで別段変りはありませんが、三六五日の一年に一度、正月元旦という「きまり」を一つ付けることは意義深いことであります。

だれしも新年を迎えた時、今年こそはと色々希望を抱き、又さまざま計画もたてますが、一年を送ってみて果してどれだけの事が実現出来たでしょうか。なかなか思うようにならないことに気づくものです。

然し、たとえ願いが満されなかったとしても悲しんだり気落ちしてはなりません。又、あらたなファイトを燃して新しい年を力強く出発したいものであります。

仏様のみ教えの事に「過去の因を知らんと欲せば現在の果を見よ、未来の果を知らんと欲せば現在の因を見よ」というお言葉がありますが、現在の状態が好ましくないならば今日の歩みを省りみて、よって来る所以を究明し、明日への

よりよき進歩への糧としたいものであります。

禪家に「脚下照顧」というお言葉がありますが、自分の足元を見よと云うことであります。今日私共の周囲が目まぐるしく変転致しますので、己れをみつめることが疎かになって落ちつきのない状態であります。

物に榮えて心に滅んでいると云われる通り日々の報道によって知らされることは、啞然、呆然どころではなく戦慄を覚えるものであります。このような事態を正す道は人間を物質主義の泥沼より救い上げる、正しい精神文化の光に浴せしめる以外にはないので、その第一に取り上げられるべきは仏教であります。

幸い仏教のみ教えを頂く私共、今こそその幸せをかみしめ責務の大なることを自覚して御仏への信仰を深め、常に善悪・是非・曲直のけじめをはっきりさせて参りたいものであります。その為めにはどのように多忙な生活の中に在っても自分をみつめ、真の自分によみがえらせて頂く聖なる場所である御仏のみ前に省る、ひと時を持つことであります。

新年にあたり改めてみ仏の前に合掌し、悔いなき一年でありますよう心に「きまり」をつけようではありませんか。



お正月と私

佐藤 治子

(浄土宗寺庭婦人会長)

「おばあちゃま。黒豆ありがとう。おいしかった。又作ってね」これは知人のお孫さんからのかわいいお礼の電話である。二十年前にもなろうか、ふと新聞に出ていた黒豆の煮方を試みてより押しつまった暮の一日を黒豆を煮る習しとなっ

私と『正月』

た。人には好きずきがあるけれど、知人はその煮方が大好きということから毎年にて上げる。ところがそのお孫さんまでファンになってしまって、お父さんの運転する車へのつとりに見える。

私はお正月がたのしい。年を重ねていくというのに、子供と同じように好きなのである。今は鎌倉の長谷通りは車の列がぎれる事がない。バスと車でぎつしりとつまった感じである。私の小学校へ行っていた頃、元日の朝、姉と従姉（母が預っていた人）と私は母の丹精の着物に袴をはき、紫色のお被布をきせられ靴をはき、今では想像も出来ないいでたちで国旗のはためく長谷通りを学校へ行ったものである。その後その頃鎌倉に住んでいた祖母の家へ御挨拶に行った。黒のりんずのお被布を着、孫娘共の年賀を待ち受けて居られた祖母にお年玉を頂いて晴れやかに帰った事は幼き頃のお正月の忘

れられない思い出の一つである。

無邪気に「黒豆ありがとう」といわれる坊っちゃんもだんだんそんなこと恥かしくていえないよという事になるであらう。けれどその坊っちゃんのお正月のイメージの一つになるかも知れない。

.....

同じように夜があけ太陽が登ってくるのに、除夜の鐘のひびいて来るその瞬間から四時間ほどねて起きた元日の朝は、実に大いなる夜明である。すべて清らかにすがすがしく、元日の朝の初水は一年の初水として沸かしお茶を入れ御仏前に供える。毎朝同じ御奉仕をしているのに何か心が清めてられていく。この心持が私は好きなのである。父の時代によく見なれた半紙を折って作った箸紙に各家族の名前をかき入れるのは、今は住職の仕事の一つ。その箸紙からお箸をとり出しお雑煮を頂く時よろづの感謝をこめて押し頂くのである。

.....

曹洞宗総本山永平寺へ参拝した時、係りのお坊さんが三十分講話をされたその中に「ここのおかゆは実においしいとよく参拝者の方々にいわれます。おいしいわけですよ。雲水が心して作るおかゆですから。何事にもこの心してというところが大切です……」「心して」……私は改めてこの一言をかみし

め心の中に入れ下山したことがある。私の学ぶべきことを考えねばならぬ事を色々の方の御話の中に出てくる。心の糧となる数々の教訓を新らしい年の出発に改めて味い会得したい。年をとったものだと思ふ事しきりではある。けれどこの大いなる夜明けは新たに感謝とこの一日を大切に、のスタートであるだけに私の心はずんでいく。「生かせて、働かせて頂く」ことのこの大いなる夜明け。私にはいくつになってもお正月は好きであり大切なものなのである。

私 と 正 月

大乗淑徳学園理事長

長谷川 よし子

近頃「正月」と云う言葉に以前のような響きが私自身になくなったが、他の人もそんな事を感じているようである。昔はこんなものではなくて何かほのかな温かい夢が「正月」と

云う言葉の中に托されてい wish なかったらうか。日頃のわびしい衣食の生活をせめて正月位は……と云う期待と喜びとに、子どもにもおとなにも、男にも女にも待遠しいような正月であった。それに加えて今一つ、過ぎ去った一年間に果せなかった事などの反省と、年のかわりの切換え、物事のけじめ等々、いわゆる自制自戒の急切なるものがあって、少くとも当分は厳肅な張りつめた気持ちが続続した。



あかあかと輝やく燈明、和蠟のまろやかな光りが堂に満ち、凍りつくような内陣の板の冷さも明けやらぬ空に、星のまたたきが硝子越しに見え一層寒氣身に凍む思いであった何十年か前の修正会早朝礼拝の様。車井戸のきしみも今日ばかりは新しい響きに聞え、み仏にささげる若水の清らかさ。やがて福茶の入る頃は香りと共に茶碗のぬくもりがほのぼのと身も心も温めてくれ、始めて新しい年を迎えたのだと若い心はずんだのであった。

「餅は食べ上げよ、元日より二日、三日と数を増して行く事、元日から腹一ぱい食べると三日目に困るよ」と子どもの食事を気付かう親心の有難さ、誰もが味わったことであろう。こうした人々の心と心が通い合う有意義な年中行事としての正月を改めて思う今日此頃である。

近年は、年を満で数えるので、正月元旦から一つづつ年が増すのではない。「お正月がくると何才になるのだからしっかりせよ」などと励ましの言葉が聞かれなくなったのも淋しいものである。また今日では曾てのように娯楽も骨休めもそれ程時をきる必要はないので正月の有難味もうすれてしまってきている。



私は新年のんびりなど考えない。平素時間がなくて疎遠になっている方々との交流をと心掛け外出はしない事になっているのが近年の習わしになっている。先ず施設出身の子ども（と云っても今は成人しているのが多い）達が尋ねて呉れる。三ヶ日に四、五十人来るが時には子どもを連れたり、新婚の妻を連れたりで、互いに友達同志平素の動向の話など話に花が咲きとても楽しい。私は一年中で一番此の時に充実感を覚える。そして時には涙が出ることさえある。

学校の先生方とのお話もこの日はやはり学校の言葉は禁句、家庭の話、子どもの自慢話などは特に嬉しい。

又一人一人に賀状を書く時の楽しさ、その方との一年に一度の心をこめの交流であるから。その面影を想像し、なつかしみながら走らせる事の軽さよ。

私はこの二つは自分の生命の火がつきるまで続けて行きた

いと念願しながら近づく正月が待ち遠しい。

新たな年を迎えて

漆 間 徳 然

(岡山県誕生寺住職)

百八つの除夜の鐘をつき終えると当誕生寺は新年の始まりである。過去数十人の僧によって行なわれた正月の勤行も現在は住職の私とその家族だけである。これも時の流れであらうか。元祖法然上人の御座像を目の前に、新たな年を迎える時、八百四十余年前、人類の聖としてこの地に御降誕あらせし上人の面影を今また新たな気持ちで思い浮かべるのである。

正月とは何もかも新鮮な気持ちで感受される。この心境こそ一番大切なものである。

私たちは、喜怒哀楽の日常生活を送っているが限らない人

間の人間たる煩惱の毎日であり僧職といいたがらもやはり私も人の子、人の子ゆえに喜びもあれば悲しみもある。また悩みを持つ一個人でもある。年の始めにせめて自分の日常生活をふり返って客観視してみると、過去の自分があまりにも愚かな、無駄な歩みをしてきたことに気がつく、そして深い懺悔と同時に、元祖上人の歩まれてきた一途な真理への追求、黒衣の求道者、法然坊源空の若き姿を想う。

私たち人間は月日が経つにつれて生活への執着、仕事への執着、さらに生への執着と煩惱は強まり、一つの人間が形成される。亡びゆく人間にとって、それらはあまりにもはかない哀れな歩みなのである。せめて私たち元祖上人の御教えを基として自己の人生を全つとうしようとするものには、それのみにとどまっていけない。一人ぼっちでもいい、世間的な批判にあつてもよい、真の人生ならば堂々と胸を張って一路に突き進むべきである。上人の越えてこられたように自己に忠実に且つまた自己に強く生きられた人間法然上人の心に返ることが一つの正月の意義でもある。執着にまみれながらもそういう心境で正月を迎えることができるのはありがたいことである。

正月は人間の一つの脱皮である。自己の誕生であり、生まれ変わる時なのである。老いも若きも歳には関係なくこの月

は私たちが限らない広大なる無量界に生きていこうとする生命の出發でもある。

当誕生寺での元旦は、本堂での早朝勤行の後、阿弥陀堂、さらに法然上人御両親御廟の勢至堂でのお念仏回向を終える、その頃には東の空も薄明かるく紅に染まっている。枯れがれの境内一面にはいつもにないより清涼な靈域が漂っている、そう感じるから不思議である。

信濃正月歳時記

山野 井 杲 琇

(果嶋女子商業高等学校講師)

信濃の話で恐縮である。「浅間に三度雪が来ると里にも来る。」とか、「高社に三度雪が降ると村へも来る。」などといわれ農民達は付近の高い山に降雪があれば、次には里にも雪が来ることを長い生活経験から敏感に知っている。そして春の

雪溶けまでの越冬準備が始まるから大変である。ちなみにこの頃の気候の様子といえば、里での初雪は平年十一月中旬頃、大雪を迎えるのは十二月初旬、平均気温は氷点下七、八度。もうこうなると炬燵一つでは足りない。冷えの程度を表現するものに諏訪湖御渡の事がある。『諏訪社御幸記』には「今月十七日夜、令_レ擬_ニ結湖水_一 同十九日寅刻、当社自_ニ大溝渡_一 下御、下宮沢内渡江上御候、佐久新海明神者、自_ニ湯渡_一 下御、同渡上御候、以_ニ此旨_一 可_レ有_ニ御披露_一 候、恐惶謹言。」とあって諏訪上社の大祝が時の幕府に注進をしていたのである。このような御渡が昔は十一月中旬を初めとして冬中三、四回はあったようである。これで信濃の冷えの程度は充分表現できるであらう。しかし近年はこの御渡の話しを聞く回数も少なくなつたのは残念至極である。公害は神様からも嫌らわれたらしい。

ともかくこんな風で長野市の「えびすっこ」（えびす講）を最後として、暮の準備を終えたと「一そば、二こたつ、三そべり。」の正月を迎える。勿論先祖の供養も「おじさい」といって晦日までに済ませてしまつてからのことである。「除夜の鐘」と共に「四方拝」として近くの神社仏閣の諸堂宇に参拝に廻る。もうこれで人々の「新年宴会」の始まりである。

信州における正月中の諸行事には次のようなものが旧態依然としてゐる。まず四～五日下伊那郡竜村坂部の冬祭り。五日武水別神社八幡宮お田植え祭り。六日善光寺のおびんずる回し。八日上田市八日堂（信濃国分寺）縁日。十～十一日松本の飴市。十四日下伊那郡阿南町新野の雪祭り。十五日野沢温泉の火祭り・各地道祖神祭り・どんどん焼等である。こうした諸行事を第一として信濃の人々自らの正月の行為を決定する。そして近くでこうした行事がある時は、当然人呼びも、また他家への訪問もできるだけ避けるのが常識となつてゐる。というのは、信濃の冬、正月は雪が深い、それが農家にとっては年間を通じ唯一の農休みの時期だからである。今でこそ、それこそどの家にも天然色テレビがある。少し前まではそれがあつた訳でもない。これらの諸行事が正月に家中で楽しめる娯楽であるからこそこうした常識が人々のなかに作られてきた。

前にもいったように「一そば、二こたつ、三そべり。」といつて各家それぞれの生活を楽しむ。嫁はその家に來た時から、姑御より家風にあつた味を教え込まれる。「手打ちそばの味もその一つである。一般には石臼によつて製粉をする。そば本来の風味を出すにはどうしても石臼で手碾きする必要がある」といわれている。そしてそば粉に小麦粉か、山ゴボウの葉

の繊維を「つなぎ」に使用して巧みにそばを作る手法が受け継がれている。収穫したばかりの秋そばの味は正月に食べてこそ最高で、その出来ばえは嫁の腕の見せどころであり、家の味であり、正月の味となつて楽しませてくれる。手打ちそばも美味だが、「そばがき」もまた格別である。やはりそばの味も「こたつ」が一段とその美味しさを増してくれるのである。そば同様その家独特の餅、漬物（野沢菜）を食べながらお茶を飲み、よもや話に夜のふけるのを忘れるのも炬燵なればこそである。だから信濃の人々は中風を煩う人が多いのであろう。ともかく炬燵は信濃の人にとって冬の寄りどころとなつてゐる。話に疲れたら「そべる」のである。農休みにはこれが一番である。腰まで炬燵に入り腕まくらでひと寝むり、これぞ正月、どんな家でもこんな様子が正月中展開されている。これがまた「そば・こたつ・そべり」が正月における接待の方法の一つでもある。

正月の三ケ日が終ると信濃の各寺院は檀家へ年始廻りに歩く。各寺院独特の軽品を持つて御住持自ら寒気の中「○○寺年頭」と大声を出して歩くのも正月の風物である。各家ではもう長い間の習慣で菩提寺の「おっしやん」が何時に來るかわかつてゐる。だからお茶を用意し、餅を焼き、炬燵の火を強くして待つていく。それが「おっしやん」にとって

ば、單なる形骸に終ることにならう。もとよりこれは仏教にかぎったことではない。東洋の精神文化一般についてもいえることではなからうか。自然との主体的一如の心境をよにして東洋精神文化は成立しようがない。やはり西洋文化に類のない茶道にしても、唐の盧同『茶歌』、『古文真宝』前集 謝孟諫諷惠茶歌中に、「仁風暗に結ぶ珠蓓蕾」とか「至精至好且つ奢らず」といわれるゆえんであらう。そこに「珠蓓蕾」といい、「奢らず」というのは、自然の含蓄の豊かさと深さを指すので、一点一画の揮毫にしても、念々の称名にしても、みな相通するところである。「珠玉のようなつぼみ」の豊かさ、「奢らず」といえる自然の深さ、これを窺うのであれば、新春の初釜の席も意義を失うであらう。

「奢らず」とは「自然」のことにほかならないが、ただの自然では文化にはならず、そこに「至精至好」が予想されて、いわば「行ずる」、いな「行を行ずる」通路、道程に立たねばならぬ。『槃若心経』巻首の「観自在菩薩行、深槃若波羅蜜多」の「行」もじつは梵本では「行を行ずる」(チャリアーム チャラマーノ)となっており、また念仏でも同様で、唐の善導大師(631-681)『観経疏』

(散善義)にも、「行を行ずる者は是を正行と名づく」といわれている。これを欠いても成立する西洋の「法則性」文化は、機械的生産を促して、自然の破壊、人間の自滅を招くが、「行行」に立つ東洋の「各各性」文化は、万物万人の「各各性」を万様に生かす自然の奥深い含蓄に根ざす。そこをわたくしは重層立体的無二性とも名づけるが、かくいえるわけを少しく述べる。

「至精至好且つ奢らず」というのであるから、製茶の方法は至上であるし、したがって喫茶して味もこの上ないが、しかもその茶のよさは、砂糖を加えて甘くするとか、醬油を入れて鹹くするとかの外からの調味でなしに、茶そのものの含蓄の自然を生かきったよさにほかならない。それを「不奢」というので、茶でもそこまで生かせるからには、人間一人ひとりの自然のいのちの尊さが一人ひとりなりに生かされないはずがなからう。それをただ少数者のみが全うするのでなしに、万人平等に全うできるのを本願の念仏というまでである。

茶席に入つて先ず拝見する床の書幅にしても、筆・紙・墨・硯等々いずれもそれぞれ数多きなかに、この筆、この紙、この墨、この硯にしてはじめて出しうる独自の

かろうか。

現代は明治以後百有余年西洋文化の決定的影響をうけ、ために公害も生活をおびやかすまでにいたっているのであるから、いかに外面は経済的繁栄のようでも、内面が荒れ、いのちが枯れてはおしまいである。これを救うものは、深い東洋精神のほかになからう。自然を破壊するのでなしに、かえってその自然のいのちの根源へ通う精神文化の粋は、東洋にしかない。西洋には全く類のない、お正月にも書初めをする書道についても、わたくしは「精神文化の粋としての書道」を論ずること久しいが（教育書道誌『耕心』創刊昭和二十八年第四号以下数十篇掲載）、書祖の後漢の蔡邕も「書は自然に肇まる」と断じ（『書法正伝』巻五、二丁）、書論として随一の唐の孫過庭『書譜』にも、「自然の妙有に同じ、力運の能く成すところに非ず」と力説している。古来わがくにでも、「筆法は筆法にして置、かくときは只心とかくべし」（『鳳朗集』）と強調されるゆえんであらう。

念仏にしても同様で、自然の心の生活にほかならない。いわゆるお十夜の典拠なる『無量寿経』（巻下）の、「此に於て善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の

国土に於て善を為すこと千歳するに勝れたり」と断ずる命題の前後を見ても、その「修善」の目ざす「自然」をば、日々の現実を生かすことをこそ重視している。この『無量寿経』の第十八願に取組みながら（『選択本願念仏集』第三章）、全仏教をば念仏におさめたわが法然上人（1133—1212）の、その「法然」という名の意味までが「法爾法然」のことで、法爾は自然法爾に通じ、したがって自然にほかならない。法然門下の親鸞聖人（1173—1262）にしても「自然法爾」を力説したので、言葉は変ってもそれを出でず、たとえば「義なきを義とすとは大師聖人のおほせに候き」（『末燈鈔』）とある「義なきを義とす」というのも自然の心に立つからで、ここに「大師聖人」とは法然上人を指す。法然仏教の重点は「平等往生」にほかならず、念仏が自然の心の生活であればこそ善・悪平等に道の開けるゆえんである。とはいえ他方禪系統の「無」にしても、やはりここにいう「自然」の心のほかにない。ただ万人平等に、そこに直参する称名一行によるか否かの別のみである。

禪にしても念仏にしても、自然の心になりきっていく方法を異にするのみで、どのみち自然の心に立たなければ

現代生活と浄土教



山 本 空 外

(広島大学名誉教授)

新春を迎えるあたり、この現代生活が浄土教のおかげのなかに過ごせることの有難さを喜べるほどの幸せは、おそらく他に類がないであろうと痛感せざるをえない。お念仏、一声々々のうちに、こうして生きられるゆえんの、いのちの根源ともいうべき阿弥陀(無量寿光)に帰る、照らされる尊さには、感涙をおさえられないこともある。わたくし自身、昭和十年夏八月以来、五十有余年の日々を、南無阿弥陀仏のいのちの杖のおかげで、生きられるぬうちを深く味わいながら、生活の意義を掘下げて今日にいたったので、わたくしにとって、ここで浄土教というのは、すでに生活そのものであるのである。

浄土教とは何かを尋ねて、印度・中国・日本等の仏教文献を比較論究することは、学問的仕事として、はてしなくいかようにもできるであろう。とはいえそのような論究ならば、たとえ自己自身は念仏生活をしていなくてもできることなので、そうした、主体的原点から離れての、客観的分析なり批判を、わたくしはここで述べようとするのではない。歴史的時・空面に形成される、その奥に動く根源のないのちに感応するところにこそ仏教の面目があり、これを平等に、万人漏れなく体験しうるのが、浄土でもあるし、浄土教といえる重点であろう。公害などでさががれている今日、とくに大きなことではな

はたまらなくうれしい。たまにはある檀家で用意されたお茶ならぬ、お酒で暖を取り過ぎ、もう年始廻りも終りなんていることも年い間に一度や二度はある。それこそ「おっしやんが俺家で酒を飲み寝ちまった。」といって近所に話して歩く。それが田舎の寺と檀家の間における会話の一つであり、外で見ていると滑稽である。

「向こう三軒両隣。」「遠い親類より近くの他人。」で隣近所は何かと頼りになる。正月、農休みの時だからこそ、顔を会わせることも多く、つき合いも多くなる。良い事、悪い事につけて何かと隣近所は助けあう。だからこそ、正月の農休みの時に、そばや、漬物、餅、お茶、炬燵、時にはそべりで近所のつき合いを良くしておく。信濃での隣近所というのは近くの家五戸程をさす。この五戸程の近所というのは、いわゆる江戸時代における農村統合政策の方であった。五人組や組合、伍長組などの形が残り伝わって現存するものである。その家の良い事、悪い事は人寄り隣近所の協力で成り立つといっても良い。しかしこうしたお互いの力も、時には隣近所への遠慮といった心づかいにもなつて、何かはずかしいことでもしでかすと、それこそ「人の口に戸は立てられぬ。」であつて、近所への顔向けできぬ」となつてしまふ。ともかく何といつても隣近所。正月だからこそ、そのつき合いも、

つかれ離れず、あつさりとの心を通じあつた暖かさを持つていきたいものである。

十五日の小正月の終りには「どんどん焼」がある。「松月の松迎え」といって正月に各戸で飾った門松や、しめ縄を集めあらかじめ道祖神の傍に立てた樹木にかけ、その先に五色紙を飾る。中には竹を入れて焼くが、炎が夜空を赤く色どりパチパチと音をたてて燃えさかる様は実に壮観である。子供達は「書初めを投げて、高く上がれば上手になる。」といつて喜ぶのである。また「どんどん焼の火で焼いた団子や餅を食べると虫歯にならぬとか、病氣にならぬ。」などと縁起をかつぐのである。十五日は成人の日でもある。一人前になれば酒やタバコを親しんだり、また夜遊びも認められた。一方一人前として仕事の量を、たとえば田起こしと田植えは四俵どりで、草刈りは一日三〜四駄という風に決められ、この規準をはたすことは容易でなかった。

こうして信濃の正月は雪と炬燵と漬物とお茶・餅とそべりで過ごす。だから「ズクなしの大カンガラ」とか「信濃者の大食い。」などと昔から川柳人の笑ひものにされてしまふが、その大食らいの大カンガラでも、大ズクはあるぞと、つい炬燵のぬくみにズクなしになりやすい信濃の正月における冬こもりである。

味わいが相互に取りあわされて、この筆とこの紙、この紙とこの墨、この墨とこの硯というふうな、自・他相互に生かされきっていきのちのはたらく主体としての筆者の心底には、阿弥陀と直通するものがあつて当然であらう。その心の動きを拝見するのである。そんな書幅がなければ、むしろ掛けないほうがよからう。わたくしが重層立体的無二性ともいうのはそこを指すが、もとよりそれにとどまらず、さらにその掛物・花生・釜・水指・盥・茶入・茶盥・茶杓等々やはりいずれもそれぞれ数多きなかに、この掛物とこの花生というふうに、しかもすべてに通ずる取りあわせの綜合に及びながら、その綜合を支え深める亭主の心底にも、阿弥陀と直通するものがあつて当然であらう。念仏者には茶席も浄土の一隅にほかならない。

茶席は日本人の生活の縮図でもあるが、その最後に、必ず拝見されるものの一つ、茶杓のごとき、僅か竹の一片ではあつても、その一本一本の竹質のさくさ、ねばさ、その他の加減等々を、そう削らなければ削りようもないほど、千変万化する竹質のそれぞれなりに生かしきっていく刀の冴えを拝見するわけである。それも名作を

結構と見るのでは半解で、じつは自ら茶杓を削る行中に体験する悟入にもとづくのが本当のようである。小刀と竹一本あつても茶杓は作れるが、竹一本一本のもつ各各性を生かしきっていきけるような刀の冴えかた、刀と竹の自・他一如の「無二性」が重要なので、そこに無二的人間の形成が行ぜられることになる。念仏にしても木魚一つでもあれば、称名の声と木魚を撃つ音と主・客一如になるところ、大自然のいのちを呼吸する心境は、日々出会ういかなることをも自分なりに生かしながら深まりいく。ところが西洋人には竹の理解乏しく、古来筆・紙・墨も南無阿弥陀仏も木魚も考え出せなかった。

法然上人が「八宗九宗みないづれをもわが宗（浄土宗）の中に一代をおさめて、聖道浄土の二門とはわかつても（中略）宗をたつるおもむきもしらぬものの、三部経にかぎるとはいふなり」（『拾遺和語燈録』巻下、元享元年本）といわれ、また「浄土宗の中に大小乗の諸経皆悉く在る可き也」（古本『漢語燈録』巻八）ともいわれるゆえんを、前述のごとき重層立体的無二性の生活に行じていくところ、現代生活と浄土教の深意が世界を照らすことにもなるう。

「あけましておめでとうございます」と仮名で書かれた年賀状が多くなった。それに当主ばかりでなく家族一同の名が列記されていることが多い。例年のように賀状を受け取ってみて、昨年生れた赤ちゃんの名を初めて知らされて、新春に相応しい明るい気持にさせてもらえる。

「門松は冥土の旅の一里塚」

という句は有名であるが、普段ならよいとして、正月にこの句を思い出すと、何んとも天邪鬼のような感じをうける。一休和尚は臨済宗の大徳には違いないけれども、どこか臍曲りのところがあつたのであるまいか。正月は一年の初めの大切な月ということであるが、その他にも喜ばしく楽しい場合にも用いられる言葉である。年の初めに国民挙つて喜び合うことこそ、楽しい自然の姿である。体裁のよいお世辞のことを正月言葉というが、お世辞と知つてもお互に喜び合う習慣はよいものである。

正月仕舞の第一は門松である。もともと松は神の憑依体

「春」のお歌

— 1 —



(淑徳短期大学講師)

村瀬秀雄

意味する神聖な木である。松を門戸に立てるのは、そのまま神の降臨を意味するものである。竹は季節によって色を変えることがない。その地下茎からは次々と筍を生じ、やがて節部から枝を互生させて叢生させる。しかも節の正しい成育ぶりは、単にめでたいというより一家の繁栄はこのようであり

たいと願う気持がある。また若く美しい人を形容するのに、竹に油を塗るというが、この言葉は竹に相応しい喩えである。

松と竹に次いでは梅である。

梅は春に先立って雪中にすら咲き競う。気品のある色とかおりは気高く美しく、万人の愛する花である。鎌倉の御家人梶原景季は、生田森の合戦で簾に梅の小枝をさして戦つたという。彼はただそれだけによって今に至るまで有名であり、簾の梅と呼ばれ奥床しい話として語りつがれてゆくであろう。

また軒にはしめ縄をはり、座敷には輪飾りを下げる。もともとこれらは神の存在を表示するものであるから、その場所が神聖な区域であることを示すために行なうのである。天の

岩戸におかくれになった天照大御神が、外にいる神々のさんざめきにつられて岩戸を出ようとした時に、かねて待受けていた布刀玉命が、急いでしめ縄を大神の後方に張りめぐらしてしまった。そして「これより内にな還り入りそ」と申し上げた。そこで大神は再び岩戸の中にもどれなかったと古事記にのべられている。神々の折角の苦心によってお出ましになった大神が、再びもどれないように後方にしめ縄をはったことは一種の呪いであって、いわば一方交通の標識であった。神はしめ縄を乗り越えられないのであるから、しめ縄の内側はいつまでも神のいる所であり、神聖な場所となるわけである。

餅は祭典に用ゆる供物である。また餅は保存のためにも、携帯用としても大切な食糧である。特にねじ切りにして作ったものを力餅といい、これを食べると力が強くなるというので山越しの旅に用いられたが、この餅の中には神霊が宿っていると考えられていた。馬に一片の餅を食べせると十軒余計に走るといふ喩え話があった。円型の餅を二つ重ねて鏡餅というが、もとは今のように立派なものでなく、薄く平たい形のものであった。鏡は神に通ずるというより、鏡は神体であった。天の石屋戸にかくれていた天照大御神に対して、神々は鏡を中に差し出した。すると大神は鏡をみて、自分以

外の別の神がいたのかと不審は思った。これが大神の外に出てみる理由の一つとなった。また天孫降臨に際して、天照大御神はニニギノ命に鏡を与え、「この鏡は、専ら我が御魂として、吾が前を拝くがごとく拝き奉れ」といった。このように鏡は神そのものであった。従って鏡餅というのは、二重に神聖さを表わしていることになる。正月がすんでから、鏡餅を小片にし、雑煮に入れて一族が挙って食べることを鏡開きという。この行事は近頃余り行われなくなったが、これは家族又は一族の主従関係を一つにし、その団結を固めるための祝事として意義をもっていた。

正月に他家を訪ねて、ご馳走になるものはどこでも同じ御節料理であった。その内容は野菜と豆腐の煮しめであった。この料理のもつ意味は、簡素を旨とし保存のきく料理ということであったが、それと同時にせめて正月だけは主婦を調理仕事から解放するという意味をもっていた。

しかし近來は正月を旅先で祝う人が多くなるにつれて、家庭の風習も変ってきている。これも環境と生活様式の違いで止むを得ないことであるが、せめて正月の三日間は家において、悪鬼を払う薬酒であるお屠蘇を祝いながら、反省と計画に今年を出発したいものである。

選撰集講話

〈第一回〉

『選撰集』の成立

玉山成元

(大正大学助教授)

一

最近はある意味の仏教ブームで、仏書がよく売れるという。とく親鸞・日蓮・道元関係のものは、静かなブームを呼び、法然上人はその影にかくれたようになっていく。ところが鎌倉時代以後、各時代にわたって法然上人ほど話題の多い人は少ない。とくにその著述である『選撰集』は、成立の当初から各時代を通して出版され、註釈書まで入れると五百数十種教えられる。これをみて、いかに『選撰集』が評判の書物であったかがわかる。現代と異なり、不自由な出版事情の時代に、これだけ多種類の書物が出版されたということは、いまだかつてないし、今後も考えられない。

二

『選撰集』は、建久九年（一一九八）春、当時摂政関白（現在の総理大臣）までつとめた九条兼実の要請によって作られたという。このとき法然上人は大病を患っていた。法然上人はよく風邪をひいたらしい。この年も正月早々に風邪をひいた。いつもの風邪と思って大した気にもとめず好例の別時念仏を勤めた。ところが風邪がこじれて大病になってしまった。周囲のものが心配し、さっそく医者を呼んで治療につとめ、シツプをしたり、灸をすえたり、よいということは何でも行なった。そのうえ、国内の薬はいうまでもなく、輸入薬であった高価な漢方薬まで用意し、できる限りの手当をしたが、いっこ

うによくならなかった。弟子たちは弘に祈願するばかりでなく、おたがいに連絡しあつて見舞をつづけ、一日も早く快方に向われることを望むとともに、万一のことがあつたときにはどうするかという相談までした。最大の信者であつた九条兼実も、弟子たち同様の心配を続けたが、どうすることもできなかった。今でいえば肺炎だったらしく、法然上人自身もひとつしたら死ぬのではなからうかと考えていたらしい。そして法然上人は死後のいろいろなことについて考えたらしい。やつといくらかよくなつた四月八日、法然上人は「没後利誠」を書いた。

これは自分の死後どのように葬儀追善を行なうか、また家屋・資財・土地などの財産処理について遺された遺言状である。こうして法然上人は心の整理を行ない、動産・不動産の処分を決めたが、法然上人にとってこれは第二、第三のことであつた。もっと大切なことは、教団のことであり、広まりつつあつた浄土宗の教義のことであつたに相違ない。しかし重大なことだけに、うっかり口にすることはできなかった。

三

熱心な念仏者である九条兼実は、刻々入る法然上人の病状に一喜一憂の生活を送り、一日も早くよくなつて、

浄土宗の教義を残してくれるよう懇請した。当時法然上人は六十六歳であり、兼実と比較すれば若くはあるけれども、高齢であり、八十歳まで長寿できるとは想像もできなかったらしい。いやたとえ一時的によくなつても余命はないと考えた。それなら、少し無理をしても法然上人に浄土宗の教義を残してもらい、入寂された後は、その教義を上人と思つて信仰生活に入ろうと決心したらしい。そこで法然上人が快方に向うと、兼実はしきりに教義をまとめるよう要請した。

法然上人にしても遺言状まで書き残した身である。現在では快方に向いつつあつても、生身であれば、いつまた大病になるかわからない。信者あるいは弟子の中には、ぼつぼつ異議をとねえるものもでている。自分がいつまでも生きられるならば、それらの異議者もこわくはないが、このまま死んだらますます混乱するに相違ない。それを考えると、上人自身もじつとしてはおれなかつたに相違ない。ぜひとも教義を残さなければならぬ立場に追いこまれた。さいわい大信者の九条兼実から再三にわたる要請もあり、教義を残すには良いチャンスであつた。

一方、法然上人がなくなつて一番困るのは弟子たちで

ある。どんなにできた弟子であっても、法然上人とは比較にならない。たとえ法然上人と同じことをいっても、信者の側からすれば、すんなりとは受け入れることは困難であった。スケールの大きい法然上人とは人格の面で雲泥の差がある。そのため余分な説明を必要とした。それで納得すればよいが、基礎的なものがないということとは不安であった。弟子たちのすべてが、上人の教義をマスターしているわけではない。そのうえ耳から聞いただけでは忘れやすい。だから上人と起居をともした身近かな弟子たちにしても、『選択集』があるとないとでは大きな違いである。兼実よりも弟子たちの方が深刻であるだけに、むしろ懇請を重ねたものと推察される。

こうしたいろいろな条件が重なって、建久九年の春『選択集』が完成することになった。そしてそのきっかけとなったのは法然上人の大病であった。歴史上における人間の病氣などは価値のないものであるが、法然上人の場合は、病氣そのものに大きな価値を見い出さなければならぬ。いや上人の病氣は、『選択集』ばかりでなく、法然上人を中心とする念仏者の団結という意味でも忘れることができない。この団結があったからこそ、弾圧のきびしい流罪後でも、教団を維持し、発展充実を目指す

す力となっていた。

四

それはともかく、病弱の身であれば、法然上人が一人で著述することは無理である。そこで弟子たちが援助したことはいうまでもない。昔から『選択集』は感西が法門の義を談じ、証空が経釈の要文を引き、遵西が執筆したという。ところが遵西は筆の立つことを自慢したので上人から中止を命ぜられ、感西が代って執筆したという。いずれにしても短期間のうちに『選択集』は完成しれらしい。それは『選択集』の原本と考えられるものがあつたためであらう。

法然上人は建久二年（一一九一）復興のできた東大寺の大仏殿で観経曼荼羅・浄土五祖像を供養し、浄土三部経を講じたという。奈良は早くから浄土思想が発達し、念仏者の多かった土地である。大仏造営長官藤原行隆や勧進に尽力した重源の依頼によるものであらうが、上人はこの供養をひきうけた。このときの講本であつたのが『三部経釈』で、これが『選択集』の原本と考えられる。だから『選択集』は建久九年に撰述されたものではあるが、事実上の完成は、これより七年前の建久二年以前であつたと考えられる。そしてこの後もこのときと

同様な講釈は続けられたと思われるが、それに手を入れ、完全な姿にしたのが『選釈集』であつたろうと考えられる。しかし法然上人としては、これのみで満足していたものではなからう。そしてこの裏には、もっと重要なものがかくされているように思えてならない。

五

法然上人の主張・態度は一貫しているが、人によって表現の仕方は異っていた。だから語録をみると、『選釈集』以外のことにふれている面もある。また、たとえ同じことをいっても受け取る方は、それぞれ顔が異なるように千差万別である。そうした解釈の違いが、後世いろいろな流派となつて発展していった。その上、旧仏教からの圧力が加わったり、世間で評判されるようになればなるほど、複雑化してゆき、本来の姿が失われていったように思えてならない。そして、それを是正しようと後世ぞくぞくと註釈書が出される結果になつた。しかも現在までそれが続くということは何を意味するのであろうか。われわれはそこに、汲めどもつきない法然上人の偉大な人格に接しようとする、赤裸な衆生の姿を見い出さなければならぬ。開宗八百年を明年に迎え、無心に味読されることを望んでやまない。

悔過修正

仏前に悔過するなみだ頬に濡れ

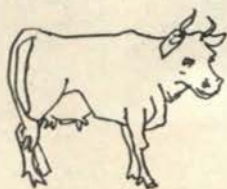
日本人にとって、新年は新春として印象のよいものである。むかしから、新年は文字の上や暦の上ばかりでなく、生活感覚的に万事のはじめであつた。正月の元日が、歳のはじめ、月のはじめ、日のはじめとして「三元」「三始」とよばれた。単に暦数の感覚から「元」といわれる以上のものが、中国人や日本人には感じられたのである。

もとは、すべて年中行事を営む日を節日、つまりセチとよんだものであり、現在でも正月の行事のみについては、「オセチ」などというところがあり、とくに除夜の年越の正式夕食の折のご馳走を「オセチ」とよぶに至つたのである。

仏教では「修正会」といい、古くから「悔過修正」の式を元日に行い、「心を正しく置き直す」ことによって、新しい計画をたてて新年を踏み出す第一歩としている。

子の年は、何か落ち着かぬ多忙の年であった。中国との国交が開けたという土産はあったものの、いろいろな事件に振り廻され、経済大国という浮き名に、駒ねずみのように走り廻った一年であった。そして迎えた年は、どっしりと落ち着いた丑の年。何か心中ホッとしたものを感じずにはいられない。

年（うし）の丑



—大正大学教授—

山 香 居 安

い。

丑という字は、元来字形の上では指を曲げた形で、牛とは何の関係もないが、古くから十二支の一つとして、牛に当てられている。そして、今日的考えからすれば、何も牛の年だからと言って、どうという事はないのであるが、それでも牛

の年ということになると、ねずみとは違った落ち着きを感じるの、不思議なものである。生活の知恵とでもいうのであらうか。

今の若い人に牛のことを聞くと案外知らない。食卓をにぎわす牛肉のことは知っていても、牛が働いている姿など見た人は少ない。従って、牛車などで、牛にどのように車を引かせるのか知らないという。テレビの新平家物語によく牛車が出てくるので、それを見るようにと注意しておいたが、牛も人間の世界へは、肉となつてのみでてくるとは、気の毒なことである。

牛歩ということがある。のろのろと一向に進まないことで、議会などの牛歩戦術でこれをよく表わしている。しかし、本当の牛歩とは、単にのろのろとしているだけでなく、遅いには遅いが、それだけに着実に一步一步と前進する意味も含まれている。大きな車に石などを積み、ワラジをはかされた牛が、遅くはあるが力強く牽いているのをよく見た私は、牛にこの上ない愛着と尊敬の念をおこさずにはいられない。牛の年を迎えたからには、こうした牛にあやかっ、この一年は着実に牛歩の年でありたい。経済大国も、そろそろ牛歩の年に入り、本当に世界を指導する大国にならねばなるまい。

しかし、牛は遅いばかりではない。一度走り出すと、とても早いものである。人が追いかけても、追いつくものではない。スペインの闘牛など見ても分るが、想像もつかない程早いものである。「牛に引かれて善光寺詣り」ということがあるが、これなどもお婆さんが牛を追いかけている内に、善光寺さんまで行ってしまったわけであり、お婆さんだから追いつけなかったのかも知れないが、怒った牛の走るのは、大変なものである。こんなところにも、何となく魅力がある。年中牛歩している者にとっては、頂門の一針である。

日本では牛は天神様の祭り神ということになっていて、大宰府神社にいくと、白い牛が神牛として飼われている。かつて、インドのネール首相であったか、善光寺に白牛を贈ってきて、今もこれは仏牛として飼われているようである。牛もここまでくると、人間様より尊い存在となる。インドでは、宗教的な意味もあって、牛を大切にすることは有名である。お蔭で、路上の牛を追ひ払うわけにもいかず、ドライバーはほとほと困り果てるということである。まさに牛の天下である。

しかし、これはインドでの話で、何処でも通用することではない。昔から牛や馬は、生活に欠くことのできぬ動物であっただけに、これにからむ格言や故事が多い。中でも「鶏口

牛後」などはよく用いられることで、小さくても頭になって、人に遅れを取るなという戒めである。勿論鶏頭となるだけで安んじていていいわけではなく、牛頭となることの方が望ましい。しかし誰でも牛頭になれるものでもないので、せめて鶏頭（鶏頭）にもなるように努力せよということであらう。

「牛耳る」ということも、盟主となってリードすることである。しかし、いいことにはばかりに用いられておらず、「牛飲馬食」「牛に経文」などというのものもある。特に後の方は「馬の耳に念仏」というたぐいのもので、余り有難い引き合（引き合）いとは言えない。

丑に関連しては、「丑の日」というのがある。夏の土用の丑の日に、「う」の字のつく精力のつく食物を取ることで、うなぎの厄日である。「う」の字がつけばよいのであるから、牛なども厄日となる。又変ったのでは、「丑三つ詣り」という恐ろしいものがある。人をのろい殺すため、夜中の午前二時から三時頃にかけて、神社などにお詣りすることをいうのであるが、牛とは何の関係もない。たまたま十二支を時間に割り振ると、そこへくるのである。

いずれとするも、この年は牛でにぎわうことであらう。年に歳々のことであるが、牛のよいところにあやかって、この年もよい年であることを願いたい。



法然上人をめぐる人びと(一)

—中国の師・善導大師—

念仏人と歴史

伊藤 藤 唯 真

(仏教大学助教授)

仰いで本地をたずぬれば四十八願の法王なり
俯して垂迹をおとすれば専修念仏の導師なり

—選択本願念仏集—

唐の善導大師は、凡夫にかなった出離の道を求めて暗然を彷徨する法然上人に、光明を与えられた導きの師であつた。

いうまでもなく、法然上人は、承安五年(一一七五)四十三歳のある日、善導大師の著述である『観経疏』のなかの

一心にもつばら弥陀の名号を念じ、行往坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるはこれを正定の業と名

づく、かの仏の願に順ずるが故に
という一文にめぐりあわれ、ながらく探し求めていたものが善導大師によって明快に説き示されていること、しかもその極楽往生の道が阿弥陀仏によって選ばれたものであつたことに、気づかれたのである。

かくして、法然上人の専修念仏への回心は、善導大師の遺教に接して、はじめて成就された。これより法然上人は善導大師に傾倒し、法文を読むにも「善導の御心」をもつてし、「浄土宗を興す」のにも「善導の釈義によつて」なされた(一期物語)のである。

また、法然上人が自身の出離においてすでに信仰を確定しながらも、その専修念仏の教えを他の人に弘めるべ

きかどうか煩われたとき、夢中に願われて上人を激励されたのが善導大師であった（法然上人伝記）、という。

法然上人の回心と教化の決意を支えたのは、実に善導大師その人であった。法然上人において善導大師の発見がなければ、浄土宗は成立しなかったであろう。善導大師こそ、時代は隔たり、国を異にしたが、法然上人の専修念仏帰入への導師であった。さればこそ法然上人は善導大師に心底から随順され、みずから「偏依善導一師」へひとえに善導一師によらん（選択集）と仰せになったのである。

この法然上人の心の師たる善導大師は、隋の大業九年（六一三）、大運河の開発で有名な煬帝の治世下に、山東の臨淄に生まれられた。ちょうどその五年前に、善導大師の師たる道綽禪師が四十八歳で浄土教に帰依されていた。なくなられたのは唐の永隆二年（六八二）、六十九歳であった。最も活躍されたのは唐が隆昌をきわめた太宗、高宗の時代で、わが国では舒明天皇から天武天皇の間である。

隋・唐初の仏教界でよく読まれて經典は、罪惡生死の凡夫が救われる教法を説いた観無量壽經（観經）であっ

た。道綽禪師も観經を講ずること二百遍に及んだという。善導大師もこの観經に接して感ずるところがあったのであろう、二十歳をすぎた頃、当時浄土教の布教者として高名であった七十歳前後の道綽禪師を山西に尋ねられた。

道綽禪師は、「当今は末法なり、現に五濁惡世なり、ただ浄土の一門のみあって通入すべき道なり」（安樂集）と、末法観と自己内観に立って、いまの時代に凡夫が救済される唯一の教法は浄土門であることをいざられた方で、中国浄土五祖（曇鸞・道綽・善導・懷感・少康）の一人として仰がれている。

若き善導大師は道綽禪師の許にあつて、観經の研究とその教法の実践に邁進され、そして、信ずるところに従つて観經の新らしい註釈書をつくろうと志された。貞觀十九年（六四五）、道綽禪師が八十四歳でなくなられたので、禪師への師事は十年と少しの年数で終つてしまつたが、この間に浄土の希求と往生業の実践が熾烈化した。「行きて西河に至り、道綽師に遇う。ただ念仏して弥陀の浄業を行ずるのみ」（統高僧伝）と伝えられている。

その後善導大師は、山西から帝都長安の南の終南山に

入り、悟真寺にあつて称名念仏に勇猛精進した。ついで長安に入り、光明寺を拠点として、さらには慈恩寺、実際寺などにも留まって、長安の市民に浄土の教えを勧めた。この間の、きびしい宗教生活が次のように伝えられている。

堂に入り、すなわち合掌跏趺して一心に念仏す。力のつぎるにあらざれば休まず。……出ては、すなわち人のために浄土の法を説いてもろもろの道俗を化し、道心をおこさしめて浄土の行を修せしむ。……三十余年、別に寝処なくして暫くも睡眠せず、洗浴を除くの外はかつて衣を脱がず。般舟行道、礼仏方等もつておのが任となす。戒品を護持して寸毫も犯さず。かつて目をあげて女人を視ず。一切の名利、心におもいを起すことなし。(新修往生伝)

実践の宗教者とは善導大師のごとき人を言うべきであらう。法然上人も大師の宗教体験に想いを馳せ、いたく心服されたのであった。善導大師の著作に、観経疏四卷(四帖疏という)、法事讃二卷、観念法門一卷、往生礼讃一卷、般舟讃一卷(以上五部九卷)があるが、法事讃以下は宗教実践の聖教でもある。往生礼讃は阿弥陀仏を詩と音楽でもって讃えられたもので、善導大師は芸術家

でもあった。浄土変相図三百余舗をつくって視覚教化も行なわれた。宗教情操に訴える洗練された教化者であった。

しかし善導大師は単なる実践、教化の人ではなかった。時代と人間と教法に対する透徹した認識が、その宗教実践の根底にあった。大師によれば、罪惡を本性とする力弱い、いまのわれわれをお救い下さるのが阿弥陀仏で、その救済にあずかるにはただ念仏すればよい、という。これが善導大師の宗教の基調である。『観経疏』には独自の論弁がみられるが、この疏を一貫している根本思想は本願念仏であると指摘されている。中国浄土教の歴史が到達した高峯に座を占めているのが善導大師である。

法然上人にとって善導大師は、単なる歴史上の人物でなく、三昧発得の師表であり、さらに阿弥陀仏でさえあった。善導大師は、法然上人の宗教的現実の世界で、阿弥陀仏へと昇化し、その著観経疏は弥陀の直説にほかならなかった。法然上人は選撰集で云われている。仰いで本地をたずぬれば四十八願の法王なり。十劫正覚の唱えは念仏に憑みあり。俯して垂迹をおとすれば専修念仏の導師なり。三昧正受の語は往生に疑いなし——と。

年 新 賀 謹

大阪市天王寺区上之宮町二六の二 上宮学園長 小林 大 巖	大正大学理事長 栗 本 俊 道 文京区大塚五―二―一〇 西信寺住職	京都市北区紫野北花ノ坊町九六 仏教大學長 藤 原 了 然	家政学園長 三枝樹 正 道
東山学園 東山高校長 東山中学校長 東山幼稚園長 藤 原 弘 道	淑徳短期大学 食物栄養学科・社会福祉学科 東京都板橋区前野町五―三―七 電話（九六六）七六三一	熊本市九品寺三丁目一ノ一 鎮西学園長 上 田 貞 雄	鎮西流根元地聖光寺住職 小 林 忍 戒 京都市下京区寺町綾小路下ル
北 川 一 有 長 寿 院 東京都台東区鳥越二―十三―十六	福井県大野市錦町四ノ十一 善導寺住職 大 門 俊 我	五重相伝 授戒会 勸誠師 小布施 弘 学 長野市松代町 長 明 寺	函館 称名寺 住職 須藤隆仙

年 新 賀 謹

社会福祉法人竜雲学園

細井照道

高松市仏生山町法然寺内

円通寺住職

後藤貞雄

東京都江東区三好一―三―三
電話(03)六四一―七五一八

東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一

清岸寺

原口徳正

神奈川県仏教会副会長

柴田敏夫

横濱市港北区菊名町

蓮勝寺

川崎市川崎区小川町六番二

教安寺

野呂幸進

真仏教舎教団本部長

裏辻賢洲

福岡県宗像郡福岡町

松原山大善寺住職

上田市中央北二―七―三

呈連寺

横内浄音

三重県多気郡大台町

大字下三瀬五五一

慶雲寺

北出立法

神奈川県葉山町堀内五六八

相福寺
明照幼稚園

杉田義俊

だん王法林寺

信ヶ原良文

京都・三条大橋東詰

平塚市立野町六

晴雲寺

塚田弘導

年 新 賀 謹

光 運 寺

飯 田 信 弘

四日市市中部三

室蘭市大沢町二二三八

善 行 寺

飯 島 英 徳

東京都港区芝公園一三一一六

天 光 院

真 野 竜 海

白 幡 憲 佑

横浜市南区庚谷台

久保山 光 明 寺

近竜寺住職

松 濤 弘 道

栃木市万町二二一四
電話(〇二八二)二二一〇八〇二番

法衣仏具(株) 安 藤 藤 助

京都市東山区古門前三吉町三三七

〇七五—五四一(八)一六一(法衣)

東京都港区芝西久保四町二六〇一
〇三一四三一—〇四二八

浄土宗専門
法衣商

千切屋 秋山幸助

京都市中京区衣棚通二条ビル

総本山
智恩院 御用達

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

一部 定価 百円
(送料十二円)

会費一力年金一、二〇〇円
(送料 不要)

浄 土 正月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十七年十二月二十五日印刷
昭和四十八年一月一日 発行

定価 百円

編集人 宮 林 昭 彦
発行人 佐 藤 密 雄
印刷人 関 二 三 男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

年 新 賀 謹

岸 信 宏
京都市東山 知恩院

浄土宗宗務所

浄土宗宗務支所

大本山増上寺法主
大野 法 道

大本山百萬遍知恩寺
法主 林 靈 法
執事長 堀 靈 光

大本山光明寺法主
石 井 真 峯

法然上人御誕生地
円光大師二十五霊場第一番
誕生 寺

岡山県久米郡久米町
国道五十三号線

大本山 善光寺大本願
法主 一条 智 光

中 島 真 孝
中 島 真 哉
東京都港区南青山二丁目二六の三八
梅 窓 院

東京都文京区小石川三丁目二四の六
伝通院住職

大河内 隆 弘

大仏殿 高 徳 院
住職 佐藤 密 雄
新住居表示 鎌倉市長谷四二二八
〒二四八

祐 天 寺
住職 巖谷 勝 雄
東京都目黒区中目黒五二四一五三
〒一五三